

研究課題	地域の障がい者団体と学校間とで学ぶイベント型インクルーシブ教育の試み
副題	～身体障がい者・知的障がい者・盲者との体験講座を通しての学びの試行～
キーワード	地域、障がい者団体、学校、インクルーシブ教育
学校名	国立大阪教育大学附属天王寺中学校
所在地	〒543-0054 大阪府大阪市天王寺区南河堀町4-88
ホームページ アドレス	http://www.tennoji-h.oku.ed.jp/j-tennoji/index.html

1. 研究の背景

これまで大阪教育大学附属天王寺中学校では、本校の生徒に対しての「インクルーシブ教育」・「ノーマライゼーション教育」の必要性を感じ、道徳や特別活動の授業時間以外での教育実践を計画してきた。例えば、技術・家庭科（技術分野）における「廃棄車椅子のリサイクル活動による国際貢献」の授業実践である。日本では廃棄される車いすを、授業で分解整備してタイヤやラオスや南アフリカの障がい者に寄贈する実践である。中学生にとって障がい者に対するノーマライゼーション意識の育成に効果があった。また保健体育科の車いすバスケット用車いすの授業実践もある。両者は特別な授業ではなく、通常の授業として、その該当学年160名全員が受講する授業である。ただし、「車いすを分解整備することを生徒に指導できない」・「車いすバスケットボール用の車いすを持っていない」など、すべての学校で実践できるような内容ではないという欠点もあった。

2. 研究の目的

本研究ではその発展形として、休日である秋分の日、本校の体育館でイベント型インクルーシブ教育の講習会を「はあとふる天王寺」と題して実践し、その教育的効果を地域の障がい者団体や本校以外の学校と共有することを目的としている。

本校で「はあとふる天王寺」のイベントを実施方法は、体験講座形式にして、本校の生徒と保護者以外にも、本学の附属平野中学校附属池田中学校や附属特別支援学校の生徒と先生にも参加を呼びかけるほか、近隣の中学校である大阪市立天王寺中学校・大阪市立昭和中学校・大阪市立文の里中学校・大阪市立真住中学校などにも生徒と先生、障がい児の通っている大阪府立岸和田支援学校・大阪府立和泉支援学校などの学校の生徒と先生にも参加を呼びかけることで、地域と様々な学校間協働イベントとしての意味合いを深めインクルーシブ教育の新たな形態として定着させることを意図している。

3. 研究の経過

まず内容を、次のように決定した。体験型イベントである「はあとふる天王寺」では、バリアフリーやユニバーサルデザインの考えを体験的に学習するために、基調講演会の他、同時に実施する6つの体験的講座（学習）を実施することにした。特に参加者に楽しんでもらうため、出入りは自由とした。また体験講座を

実施してもらった講師や協力メンバーも、他の講座に参加できるようにした。

4. 代表的な実践

平成29年9月23日に行った「はあとふる天王寺」の基調講演は、南アフリカ人で日本在住のボランティア活動家であるトーマス・C・カンサ先生に、「私たちのコミュニティ」という題目で行って頂いた。この間は、全ての体験講座も停止して、全員が参加できるようにした。



6つの体験講座は、次の6つを実施した。(各講座の写真は番号順)

① 車いすバスケットボール体験講座

本校で所有している車いすバスケットボール用車いすを用いて、走行方法やドリブル・パス・シュートの練習を行った後ゲームを行う。指導は、車いすバスケットボールの現役選手が試合に参加していたため、本校の教諭が行った。

② 車いすでの生活体験

標準型車いすを8台用いて、通常の走行の仕方・回転の仕方・段差の乗り越え方・通路の通り方などを体験的に学習する。指導は公立の特別支援学校の先生が、無償で行って頂けた。

③ 知的しょう害者が行う野点の体験講座

知的しょうがい者が、本格的な茶道に則った野点を実施し、そこでお茶と和菓子を頂きながら、茶道の意味や野点の意味を解説して頂き、それを学びながら、障がい者理解を深める。講師は日頃から茶道を行っておられる団体から12名が行って頂けた。

④ ブラインドテニス体験講座

中に鈴の入ったゴムボール、低いネット、軟式のラケットを用い、目隠しをしながらブラインドテニスの体験学習を行った。指導は、ブラインドテニス協会から2名が行って頂けた。

⑤ 点字テープ作製講座

点字テープライターを用いて、点字の規則性を学習しながら、自分の名前前のテープを作製する。指導は公立の協力校の工科高等学校教員と本校の教諭が、協力して行った。

⑥ 風船バレーボール体験講座

最近、障がい者の関わる団体からも注目されている「風船バレーボール」の団体とのコンタクトがとれ、体験講座を実施できた。指導は、「風船バレーボール」協会の方が行って頂けた。



5. 研究の成果

イベント実施後、研究員と話し合った結果、次の3つの意義があることが明らかになった。

① 体験講座としての運営側参加者の意義

- トーマスさんの講演を拝聴し、自分も同じ内容の講演をしているが、アパルトヘイトなどを体験されたトーマスさんの講演は、言葉の重みを感じた。今日イベントに参加した最も大きな成果は、一流の方と知り合いになれたことだ。
- 障がい者車として様々な体験をしてきたが、茶の湯は初めてだったので、すごく新鮮だった。
- 風船バレーボールは、様々な障がい者スポーツに繋げられる入り口のスポーツとして注目をしてきたが、本日その体験講座があり、協会の方と知り合いになれて非常に嬉しかった。
- 茶の湯のお手前をしている学生が、この2～3年のこのイベントでの経験を通して、大きく成長できている。私たちの組織にとっては、「はあとふる天王寺」は不可欠の存在になっている。

このように、運営側の障がい者団体間にも大きな刺激を与え続けているイベントである意見が多く出されたことは、非常に意義深いと感じた。

② DVD作製の意義

今回作製したDVDについて、運営側になった障がい者団体や個人に感想を伺ったところ、次のような感想があった。

- 自分たちがイベントを行っている時は、とてもVTRに記録するという余裕がないので、今回のDVDでは、同時に実施されていた他団体のイベントもよく理解でき、非常に有り難かった。
- 本日参加できなかった他のメンバーにも見せることが出来て、VTRの重要性が再認識できた。
- 自分たち以外の他団体の方々が、何をされているのか理解しやすく貴重なDVDだと思う。
- 本日は運営側として講座を実施したが、本来教員なので、自分の学校に帰って次回にイベントの運営側で経験を積ませたい若手の教員に説明しやすいので貴重である。

③ イベントとしての参加者の意識変化による教育的意義

これまで「はあとふる天王寺」のインクルーシブ教育としての意義やノーマライゼーション教育としての意義は、あくまでも運営する側の障がい者団体・個人の感想や、DVDを受け取った他校の先生方からの感想を基に判断したものであった。しかし本来の教育的意義は、イベントへの参加者の意識が、参加前と参加後でどのように変化したかである。その変化を調査するために、「障がい者」という刺激語に対するイメージマップ（概念地図）を体験前後の2度実施してもらった。イメージマップとは、刺激語に対して自由にイメージしたことを放射状に記入してもらうという心理学手法の1つである。調査直前の指示の影響や周辺の友達との動向などがノイズとして悪影響を与えるという欠点はあるものの、3分間程度の短い時間に、心理学的な影響を簡単に調査できるという点で優れているので、本手法を採用した。方法は参加者に協力を呼びかけ、協力できる人には無記名で記入してもらう方法を採用した。

協力者は、全部で57名であったが、不十分な記述であると判断できた5名のは省いて52名をデータとして採用し、分析した被験者のほとんどのデータでは、体験前後で記入したイメージにそれほど大きな違いがなかった。本来イメージマップでは、体験後や学習後には、被験者が何らかの学びをするため、イメージが増加する傾向にある。その点では、数時間後のイベントではそれほど影響が出ていないということが明らかになった。しかし人数は10名しかいなかったが、体験後にイメージされた語句の数が減り内容が「障がい者に対して肯定的」になった生徒もいたことは意義深いと感じた。ある生徒の前後のイメージマップを示す。

このイメージマップでは、体験後に語句が少なくなると同時に、「障がい者」に対する不安や否定的なイメージが減り、肯定的なイメージに変化している特徴がある。まだ数は少ないが、この変化の傾向が強くなると教育的意義が大きいと判断できるのだが、まだ数が少ないので良い傾向だと判断するにはもう少し調査を継続する必要があると考える。

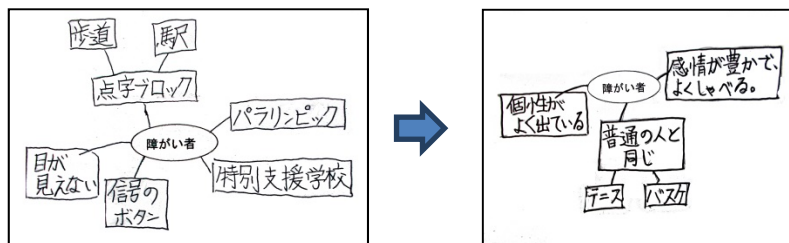


図1 被験者のイベント前後におけるイメージマップの変化例

6. 今後の課題・展望

本研究で行ったイベント型インクルーシブ教育の実践研究は、講演講師や講座指導講師のどの方であっても、非常に一流の方にお越し頂けるようになり、その講師陣も相互に刺激されるイベントとして成立してきたことは、過去5年間の実績と言っても良いであろう。

ただし今後の課題としては、イベント実施に協力している学校の教員が、高年齢化してきているため、若手の先生をもっと積極的に参加するように促すことが重要であろう。また参加校を増やすために、様々なクラブ活動などの大会を通して、他校への参加を呼びかけることも必要だと考える。

7. おわりに

本研究で行ったイベント型インクルーシブ教育の実践研究は、イベントの内容としては、非常にレベルの高いものと成ってきた。今後も継続実施するには、地域の参加校を増やすために、もっと情報発信を改善する必要があることが明らかになった。

8. 参考文献

- ・上野和彦・岡田智（2006）『実践ソーシャルスキルマニュアル』明治図書
- ・楠敏雄（1997）『知ってますか？視覚障害者の暮らし一問一答』解放出版社
- ・明石謙・岡本卓爾（1990）『リハビリテーション工学』医歯薬出版